

トーマス・マン覚書

——「魔の山」時代の政治と文学——

林 功 三

一九一四年から二三年までの、全世界を震撼させ、資本主義の全面的危機の訪れを示した諸事件、第一次世界大戦、ロシアの一〇月革命をはじめとするヨーロッパ各国における革命のたかまり……こうした事件は世界中のひとびとの社会的生活に根本的変革をもたらしたが、文学や芸術にも、はつきりとひとつの区切りをつけた。血みどろの破局と動乱の数年間が過ぎたあとでは、多くの芸術家や文学者にとって、戦前の世界は余りに童話めいた牧歌的な世界、はるかな過去の世界となってしまった。この数期間は没落の数年間でもあったが、同時に新しい時代への展望の数年間でもあった。この時代に生まれたすべての新しい芸術や重要な文学——革命的プロレタリア文学からアヴァンギャルド芸術のすぐれた作品にいたるまで——は、すべて過去への訣別と新しい歴史のはじまり、人間と社会の変革の新しいパトス、隷属から解放された「完全な人間」、反ブルジョワ的動乱といういぶきにみちたものであった。この一〇年間に世界中で起った事件は、ひとびとの意識に、かれらの今までの物の考え方はもはや無意味であること、今までの社会秩序が全く破綻してしまった以上、いかにつらいものであって

も新しい必然的な変革を受け入れ、その変革のうちに秘められた未来を追究するほかはないことを教えた。だから、芸術や文学にとっては、この戦争と革命の時代を知的に把握することが、過去のいかなる時代にもなかったような要請であり、課題だった。こういう要請と課題をともに受けとめた作家の一人はトーマス・マンだった。かれの『魔の山』は、何よりもそういう意味で「ほかにくらべるものがない」作品であり、また『非政治的人間の考察』から『ドイツ共和国について』へのマンの思想的遍歴は、一人の作家が、この時代の変革に伴う政治とデモクラシーの問題に苦渋にみちた対決を迫られ、受けとめていった、^{ヒューマン}人間的な歩みをほくらに示している。

今日ばかりはマンの文学を考えると、政治に対するマンの考え方や発言そのものを無視してはもろろんどのような意味でも理解を望めないが、従来はともすればこれをマン文学の非本質的な要素として扱うのが普通だった。そのくせ、もう一方では（ワイマル共和国時代以後、第二次大戦を経て、東西分裂の時代にいたるまで）マンほどプロとコントラのはげしい渦中におかれてきた作家はなく、『トーマス・マンとドイツ人』というテーマは優に歴史学あるいは文学社会学の対象となるものだった。いうまでもなく、マンがそういう渦中にまぎこまれたのは、本来政治そのものがアンタゴニズムを本質的な人間関係とするものであるのに、かれは第一次大戦中に『非政治的人間の考察』を書き、ドイツ的・非政治的・反デモクラシー的立場を主張して戦争を弁護しながら、敗戦後までもなく、手のひらを返すように『ドイツ共和国について』論じ、デモクラシー擁護を買ってでたためだった。この時代にマンのとった前後の立場がどこまで首尾一貫したものであったか、断絶があったか、それをマン自身の発言を具体的に逐一吟味し、かつ社会的歴史的テキストのなかへ置いて検討し、見きわめるということとはまともに行なわれてきたとはいえない。そういうことが二の次で先ず敵か味方かが問題にされたからこそ、マンと読者との間のあの問題を孕んだ関係も生まれたのだ。それゆえ、今日でも『考察』から『共和国について』

へのマンの歩みはいったいどのようなものであったか、大戦中から二〇年代の思想的・社会的・政治的状况のなかでマンはどんなことを考え、どんな立場をとっているか、マンという作家の歴史的、社会的な位置と役割はいかなるものであったかはつきりさせることはマンを論ずる以上ぼくらにとつて二重三重の意味で不可欠の課題である。それを以下にぼくなりに多少考えてみたい。ドイツあるいはヨーロッパの二〇年代と昭和三〇年代後半以降のぼくらの社会にある種のアナロギーが見られる現在、ここには多少ぼくらが身につまされる問題もでてくるものと信じている。

ところで今ぼくのとりに上げるのは、主として一五年に執筆が開始され、一八年に刊行された『考察』から、二年の『ドイツ共和国について』あるいは『ゲートとトルストイ』までのマンの歩みである。いうまでもなく、この時期は『魔の山』の創作の時代である。『魔の山』は一三年に最初の執筆が行なわれ、(一四年に一時執筆が中断され、一五年秋まで現在ぼくらがみるテキストの最初の一部分が書かれ、『考察』のため中断されたあと一九年に再着手され)二四年秋に書き終えられている。だからこの時期のマンの歩みは『魔の山』という作品の成立過程に重なるものであり、マンの政治的・理論的思考は、じじつこの小説に、その素材として、また小説の構成や文体としても、定着させられているとみられる。この時期のマンにおける政治と文学の問題という以上、コンクレートには本来何よりもそれを検討しなければならないわけだ。(そういう一例として、例えば作中人物の一人、ナフタという、進歩主義的博愛的愛国的国際主義者セテムブリーニの敵対者、破門とか火あぶりといった刑罰は人間の魂を救済するための人間愛の道具だと説き、神の子の状態を実現するためにテロルを辞さないキリスト教的共産主義者、後のブライザッヘアとなって登場する「保守革命家」は、複雑ではあるがきわめて興味深い存在ではないだろうか。マンはこの奇妙なインテリによってファシズムがそれを跳躍台にして成長した、支

配階級と小市民的追隨者の革命的状况に對する不安・絶望・猜疑・不信・恐怖・憎惡の政治的ダイナミックスをかれ一流のやり方で描出してみせていると思う。しかし現在のぼくにはその準備がととのわず、まとまったものは書けそうにない。したがって、『魔の山』考察の準備段階として、いまその評論を中心にしてマンの政治的・思想的な歩みを考察してみたいと思う。そのためのこれは文字通り單なるメモである。

一九二二年十一月、ハウプトマンの六〇歳生誕記念日を祝って、マンはベルリンのベートーヴェンハレで『ドイツ共和国について』と題する講演を行なった。この講演に對して聴衆ははじめから半ば好奇心と半ば敵意を抱いていた。もともと何となく信頼のおけないところもあったが、『戦時随想』や『フリードリッヒと大同盟』、『非政治的人間の考察』を書いて、今ではともかくも西のデモクラシーに反對する「ドイツ性」の代弁者という折紙つきのこの作家が、聴衆を相手にして、こともあろうに共和国の弁護を買って出たからだ。テキストが随所に示しているように、マンは効果を狙い、予め十分計算済みだった。

「共和国……これをわたしの口からおききになってみなさんはどんなふうにお感じになりますか……正直に申上げてしましますが、わたしの意図は、あなた方を必要な限り共和国の味方にしてしまおう、デモクラシーとよばれ、わたしがフマーテートとよぶものの味方に引入れようとすることにあります……。」

この意図の理由をマンは説明する。

「精神の名において外的な事実を否定することは、外的な事実が内面的なそれに一致しない限り、つまり現実ではあっても真実ではない限り、賞讃されるべきことであります。しかし、誰にとっても内面的なものとなった事実、これを否認する者や反對する者にとっても、すでに内面的なものとなった事実を否認し、現実においてこ

れから逃避しようとする事、それはばかげたことでしかありません。学生諸君、そして若い大学生のなかにぼつぼつとまじつていらっしやる市民の皆さん。共和国は、デモクラシーは、今日かような内面的な事柄であります。わたしたちすべてのものにとってそうなのです。わたしたちの一人々々にとってそうなのです。これを否認することは嘘をつくことにほかなりません。」国家は、われわれが好むと好まざるとにかかわらず、われわれの手のなかにわたされた。国家はわれわれ自身の事柄となったのであり、われわれはこれをよくしなければならぬ。これこそ共和国というものであり、共和国とはそれ以外の何物でもない。共和国はわれわれにとって運命となったのであり、これに対しては「アモール・ファティ」がわれわれのとるべき唯一の正しい態度である。

こういうことばを聞いて、かれらなりにマンのどこかが変わったことを敏感に感じとったからであろう、足で床を擦り、怒りと不満と反対の意を表明する学生や市民に向って、マンはいっている。「あなた方の、共和国に対する、デモクラシーに対する抵抗はたんなる言葉に対する臆病さにすぎません。——そうです、あなた方は共和国とかデモクラシーとかいう言葉をきかされただけでもう、まるで何かに怖じた馬が頭を下げて後脚で蹴ろうとするときのように、神経質な迷信に理性を奪われてしまうのです。しかしデモクラシーというのは言葉にすぎないのです。相対的なもの、時の制約をもった形式、必要な道具にすぎません。この言葉の意味しているものは古来からの我国には異質なベテンであるにちがいない、と考えることは子供じみたことであります。共和国——ドイツがまだ共和国ではないかのように考え、デモクラシーはサーベルの帝国などよりもわたしたちにとって親しみ易いふるさどでないかのように考えることは、ばかげたことです。」

『考察』の読者である聴衆がこういう言葉を聞いて憤激することも、マンには計算ずみだった。マンは先廻りしていう。

「今皆さんは腹を立てていらっしゃる。こうして大学当局の先生方が臨席していることにより、あなた方の血氣を抑えて下さらなかったら、あなた方はわたしに向ってこうになるところでしょう。『何だって？ それではお前の書いた本はどうなるんだ。あの一八年の反政治的・反デモクラシー的考察はどうなんだ。この変節者、転向者め。おまえのいうことは辻褄があつていないではないか、さっさと演壇を降りろ。無節操な転向者のくせにわれわれをくどきおとして味方にするなど、とんでもないことだ。』とおっしゃりたいのでしょうか。」

しかしマンは直ちに言葉をつないでいっている。「いいえ皆さん、わたしは演壇を降りたりいたしません。わたしにはまだみなさんにお話ししなければならない大切なことがあるのです。変節、転向、ということに関しましては、よく考えてみて下さい、これは必ずしも当ってはおりません。わたしは自分の書いたことを何ひとつ撤回はしません。本質的なことがらは何ひとつ撤回することがありません。わたしは本当のことを書いたのです。そして今も本当のことを申上げているのです。」

こういつてマンは例の、ノヴァーリスとホイットマン、夜と地下の鉱坑と宗教審問を讃美する肺病病みのドイツ詩人と、アメリカの、若々しいバツカスのエネルギーにみちた、デモクラシーの讃歌の詩人とを——エロスとタナトスという共通項で——結びつけようという、途方もない大胆な試みを行なっている。

マンはノヴァーリスの『断片』とホイットマンを引き、デモクラシーがロマンティクと全く同様に「心理学魅力をもちうること、共和国がドイツロマン主義と同じレベルを持ちうることを強調する。ノヴァーリスのゾフィーへの愛、死と夜と聖餐のエロティク、「悪質な新婚の夜の床の連想」にみられる「社会心理学のラジカリズム」と、ホイットマンの健康そのもののような男性的情熱にみなぎる少年讃美、政治家をエロスとして歌う「草の葉の歌」、このおよそ正反対とみえる両者に深く共通するものがある、とマンはいふ。「死と病氣への、病理学

的なものやデカダンスへの関心は、生や人間に対する一種の表現にほかなりません。それは医学という人文的学科が証明しているとおりです。有機的なものや生命に関心を抱くひとは、つまり死に関心を抱くひとです。」とマンはいい、「死の体験が結局生の体験であること、それが人間へ導くものであること」をマンは強調する。

マンはドイツロマン主義を心のふるさととするドイツの学生や市民たちに、できるだけデモクラシーがかれらのナシヨナリズムの口に合うように、ノヴァーリスをお愛想に引合いに出したのだろうか。そうではない。マンはむしろ本気である、どころか、これはまさに『魔の山』の主題なのだ。

デモクラシーを語るマンは、ここで直接に政治または思想のことばをつかつて政治意識を問題にするというやり方ではなく、性意識の在り方を通じて政治意識の実体をすくい上げるといふやり方をとっている、といつてもいいだろう。ひとが政治を人間関係の制度や機能と考え、正義とか福祉とか自由とかいふた普遍的理念を実現する行為と考え、あるいは人間の合理的活動の表現と考えたとしても、政治はそうしたものに止まらない。実際には政治現象の深層には人間の本能がうごめいており、人間において政治的なものと性的なものは深くかわっている。だから政治を問題にするものは、政治と性のからまり合う深い根柢まで自由な考察の測錘をおろしていかないわけにはいかない。フロイトの名前こそ挙げてはいないけれども、ここでマンの行なっているのは、心理学の政治哲学への適用であるとみていいだろう。ここでは心理学と政治哲学・社会哲学の境界は喪失させられている。マンのこういうやり方には深い理由と大きな説得力がないだろうか。かつて自律的なものだった人間のこころの過程は、今では国家や社会の中で個人の演ずる機能に解消され、文学・心理学的問題がそのまま政治的問題となつてしまった。また個人の精神障害は社会一般の政治的障害ときつてもきれないものとなつてしまった。こういう状況で文学・心理学をそのまま政治的な事柄として扱うことは全く必然なことというべきである。とすれ

ば、デモクラシーというような政治的カテゴリーを説明するのにこれほど説得力のあるやり方があるだろうか。ノヴァーリスあるいはドイツロマン主義をデモクラシーと結びつけることにはもちろん問題が残るかも知れない。そもそもドイツロマン主義が政治的に新興ブルジョワジーの革命的精神の表現であったか、それとも封建的革命的意識形態であったかは、別に歴史的な検証を必要とする。けれどもひとつだけいえることはこういうことである。ふつう性を主題として拡大することは、よく今日でも頽廃であり、現実逃避であるとされる。しかしそういう批判こそは、じつは現実との妥協によって、そういうひとびとの政治意識にしのびこんだ歴史的社会的「良識」によるものであり、官僚的秩序維持の意識によるものではない。フランス革命のひきおこした大きな変動のなかで、ピューリタニズム的猫かぶりの市民道徳に衝撃的批判を加えたロマン派やゲーテにおける性と政治の問題は、今日もう一度見直されていいだろう。マンは伝統の修正ないし再構成といううちよつとまねのできないことをやってみせたのだ。

けれども、当時の聴衆にマンのこの講演がどれだけアピールできたかは疑わしい。ひとびとはおそらくこれを含くのデマゴギーとみなしたらしい。マンはこの大胆な講演（ノイエ・ルントシファウの十一月号にも掲載）によって早速ドイツ・ブルジョワ社会で完全に「政治的ケース」となった。四年前の考察が、まだ多分に一般にはハインリッヒとの兄弟喧嘩という、文壇的・通俗的・猟奇的なスキャンダルにすぎなかったとすると、この『共和国について』が捲きおこしたセンセーションは、まさに「政治的」なものだった。マン自身がどう弁解しようとかかは全くの変節者で、政治的には日和見主義者であるということになり、コケティッシュで魅力のある散文を書く作家ではあるが、根源的なもの、単純な偉大さ、ほんとうの誠実さと悲劇がない「文士」にすぎない、という評価が行なわれるようになる。

マン自身は、じぶんは『考察』の、「意見は変えたが志向は変えていない」といつている。いったいマンは変わったのか、変わらなかったのか。一人の作家、一人の人間が政治的に「意見を変える」ということはどういうことなのか。『考察』でも「私は一生涯、あのインドの聖者がへそを見守っていたように、一つの知的公式を守っていられる人間ではない」といい、「わたしはバランスを好む人間で船が右に傾けば左に、左に傾けば右に本能的に身を寄せます」（三四年）といっているようなマンのばあい「心境の変化」というような文句は無意味だし、マンの政治的・思想的变化を、個人的・私小説的文脈でとらえ、「思想的発展」、「成長」、「成熟」といったことばでばやかしてしまふことに、ぼくは余り意味を認めない。また宗教的回心のようないしはショノクのような非合理的な突然変異的な生まれ変わりもマンのばあい到底みとめることはできない。むしろ、このばあい「転向」ということばをつかつて、政治的強制力と人間の内発性とのからまりのなかにある変化を考察するのがいちばんすっきりするようだ。転向は、どんなばあいでも、一人の物を考える人間にとって必ずしも不名誉なことではなく、また不変性は名符とはいえない。だれでも、じぶんの立場を絶えず新たな事実と経験によって吟味し修正し、発展していくものだ。問題はその立場の転回ないし変化が、どのような内的必然性をもって行なわれているか、である。

このころマンの行なつた転向に対して加えられたもつとも痛烈な発言のひとつには、たとえば次のようなものがある。

「われわれは決して民主主義者^{デモクラート}ではなかった。けれども、当時ドイツにおいてデモクラートであることは、ともかく立派なこと、つまり反対派であることだった。人間殺戮の時期に、トーマス・マンは民主主義を浅薄で非ドイツ的、外来の産物である、といい、反対派であるわれわれを『デモクラート』と呼んで罵倒していた。今

日デモクラシーはかれの辞引きのなかで論戦のことばではなくなっている。今ではそれは『それなしにはわれわれがもはや生きていくこともできない』原理にかわっており、この原理に『われわれの国民的名誉がふくまれる』ものとさえなっている。今ではデモクラシーはマンにとって『すべてのドイツ市民のための道』である。かれのタウゲーニッツ心酔、あるいはこれに続いて間もなく出た全くいやらしい、くだらない書物である『非政治的人間の考察』——教師じみた横柄さで、哲学的に全然根拠のない反ヒューマニズムがここではタウゲーニッツ心酔を講義している——の文章を、この先生の最近の講演のある種の文章と並べてみれば、かれのたましいのなかでは白いものが黒いものになる過程がどれほど短かつたかを、われわれは示すことができる。『トーマス・マンを否定するトーマス・マン』というパンフレットはわけなくつくれる。一作家の仕事のなかでこれほどおどろくべき、しかも生来これほど悲劇を喪失した矛盾は世界文学にも例がない——どころか、これは矛盾でさえないのだ。トーマス・マンは回心するような男ではない。トーマス・マンは転向など行なう男ではない。かれはおよそ転向者とは反正対の男で、全く変ってはいない。つまりかれははじめから保守的だったのだ。反抗、プロテスト、反乱はおろか反対といった音色さえ、この心情の鍵盤のどこを叩いても出てくるものではない。この文学好き屋は過去のものに情熱的な親しみを抱いている。いわばかれがその上を滑りながら立脚している基盤、それは事実という地盤である。リープクネヒトが監獄にいたときかれは骨の髄までプロイセン主義者だった。エーベルトが国家を牛耳るようになるとかれはすっかりデモクラシーと一体化した。ドイツの知識階級のなかでトーマス・マンほど代表的な代表者はほかにない。あの敏感な、ゲーテ、ゴットフリート・ケラー、フリードリッヒ・ナウマン、レンスやビスマルクやボンセルスに学んだ市民たち、あのいかめしく洗煉された大学者先生方、あのごりつばに育成された商人たち……にマンは、かれらが必要とする形而上学を与えてやる。深遠な静観の意味深いアラベス

クで、かれは現状ならびにかれらの現状肯定を飾ってやる。諸君がおのぞみなら、かれは距離を、文化を、ユーモアをもっている。かれは、(通俗的な) 冥想と理解の哲学者であり、その時々々の支配的現状の……弁護者である。かれは俗物だがひどく鋭敏で頭がいいから、一層始末が悪い。俗物主義の布教者であるかれは甘受する。甘受することを要求し、甘受の深刻な理由をつくりだし、甘受しない人間に高尚なやり方で嫌疑をかける。

しかし甘受はいやしいものだ。トーマス、マンはドイツ人のなかでもっとも保守的な、もっともいやしい作家だ。」(クゥルト・ヒラー、二五年)

たしかにマンは「リープクネヒトが監獄にいたとき」戦争肯定の筆をとっていたし、戦後この『ドイツ共和国について』では、シャイデマンとまではいなくても、エーベルトを個人的に弁護している。これを否定することはできない。総じて戦争と革命のこの時代の政治のなかに、マンのこの時期の政治的発言を直接おいてみるとき、それを弁護することは到底できない。したがってぼくは、このヒラーの見解をばくなりに肯定するものだ。

けれどもマンの共和国弁護は、ヒラーのいうようないやしい日和見主義だったろうか。日和見主義者ならむしろこの当時『考察』に続いて共和国やデモクラシーを罵倒していればよかった。なぜマンは、誰がみてもわかる「トーマス・マンを否定するトーマス・マン」となったのか。

ヒラーの発言は、ワイマル共和国内での「左」からの数少い攻撃のひとつであるが、総じて左翼側からのマン攻撃はごく稀であり、右からの攻撃は圧倒的に多い。左翼にはもっと現実的でシリアスな課題があったし、二〇年代にマン批判を行なうことは余りアクチュアルな問題となるはずはなかった。白色テロと一揆を目的とする陰謀的軍事秘密結社や極右団体がさながら雨後の筍のように発生しつつあった当時のブルジョワ体制のなかで、かれらが精神的拠点と詐称するドイツのナショナルな文化概念の偏見を打破しているマンを攻撃することは、必

ずしも有効ではなかったからであらう。

クアルト・ゾントハイマーは、マンの『共和国について』の講演以後、ドイツの反民主主義的勢力がマンをどのように迎えたかを、当時の新聞、雑誌類を克明にしらべて紹介している。そのなかからいまほんの二三の例を引いて、先ず当時のナショナルな反デモクラシーの側から行なわれたマン批判をみておくことにしよう。

その一。バイエルンのナショナルな新聞『ミュンヘン新聞』（二二年一〇月）——「詩人であり、わが市民であるトーマス・マン氏はベルリンでこのたび若干の考察を発表しているがこの講演が非政治的人間の口から出たものであるなど何と断言する必要はなかった。雲の中に漂っている人間、現実の事柄を何ひとつ知りもせず、知ろうともしない人間だけが、このような口を利くことができるのだ。親愛なるトーマス・マン氏よ、あなたはそれにしても一九一八年には文明の文士たち、あのわれわれのふるさとを汚そうとする連中に対して、いかに正しい判断と適切なことばを示したことか。トーマス・マン氏よ、あなたはベルリンにいるあなたの友人たちをも一度よく観察していただきたい。かれらのなかに一八年の例の不愉快な知人にでつくわさないかどうかしらべていただきたい。……」

その二。メラー・ファン・デン・ブルックを中心とする「六月・クラブ」——このサークルにはM・H・ベーム、H・V・グライヘンなどが集まり、かつてマンはその保守的・文化的姿勢に共鳴していたが、ラーテナウ暗殺以後峻しく対立するようになった——の機関紙、『良心』は『Mann über Bord』というタイトルを掲げ、次のようにいっているという。「トーマス・マン氏よ、あなたはヒューマニズムをドイツ的美徳だと説いた八〇年代の柔和な詩人と同じようなお説教をなさっておられるが、そんな美徳は今日では淫売用語になってしまったことを知らない者はない。あなたはいま、演説を行なった演壇で、市民になりはてたのだ。政治に血迷い、デモク

ラシーの手中にはまりこんだ市民になりはてたのだ。ここには悲劇などみじんもない。……われわれにとって共和国など何の関係があるだろうか。ドイツ万才！」

その三。一九二二年一月二八日付『ミュンヘン・アウグスブルク夕刊』紙に載ったハンス・ヨーストのマン宛公開状。「ロマンティクの視点はイデーと永遠だったが、あなたの視点は時代とエーベルトだ。これでもうわれわれ若い世代の判定は下ったのだ。……あなたは、あなたのドイツ精神を時世に、妥協に、政治的実践に売り渡した。このことは、私には、詩人たるものがみずからの永遠の使命に対して行なう何よりも悲しむべき否定である、と思われる。」

例は限りなく続く。ほんの一握りの例外——例えばE・R・クワルティウス——を除いて、マンの『考察』から共和国講演への歩みは不信と批難の的だった。こうしてマンが、当時の「匕首伝説」のはびこる反デモクラシイ的思想状況のなかで、全く孤立していたことを、まず確認しておきたい。

しかし、マンにとって、かつて、そしていま、政治やデモクラシーとはいったい何であったのか、それをもう少し具体的にみていく必要があろう。

マンの「時局奉仕」は『戦時随想』（一四年一月）からはじまる。マンは、『ヴェニスに死す』の後一年間経って、一三年夏以来これに対する「ユーモラスな対照的作品」を書いていった。軽い肺結核にかかった妻カーチヤの療養するダヴォースに一二五年五月から六月にかけて滞在したマンがそこで受けた印象が、『魔の山』の基礎だった。

サラエヴォの事件と第一次世界大戦の勃発はマンにとって「全く思いもかけなかったこと」だった。「憎まれていたが、運命の謎にみちたドイツに共感を寄せていた」マンは「このドイツが文明を必ずしも最高のものと思

っていないのに、ともかくも、世界に呪われたその警察国家形態を打破しようとしている」のをみ、「途方もない好奇心をもって」大戦を迎えた。

が、間もなくマンは戦争により自分自身の生存が危機にさらされるのを感じた。「戦争が永びけば、わたしは必ずいわゆる人生の敗残者になってしまうであらう」とマンは書いている。しかし、マンは多くの芸術家たちと同じように、この戦争を歓迎した。「偉大な、全く真面目な、どころか莊嚴な国民戦争」とマンは兄宛の手紙でも書いている。心から、ではなく、シニズムからマンは戦争を肯定しているようだ。「人々がもう戦争を信じないとなると、よいことではありません。そうなるとう人々は、かれらがひとかどの人間になるために必ず信じなければならぬ多くの事柄を、信じなくなってしまうでしょうから。」といったこれが、一人の芸術家をアッシュンバッハ——かれのデカダンスへの没落は認識への拒絶から、始まっている——のような姿で描き出して見せた作家のことばと思えるだろうか。いったいマンは戦争の何であるかを知らなかったのだろうか。

マンが戦争について公的な発言を行なうようになった時期は比較のおそい。デーメル、ハウプトマン、リルケ、ヴォルフスケール、グンドルフ、ムージル、ケルなどあるものは感激をもって戦争を讚美したり、あるものは一般のナショナルな感情に対する不満を表明する発言を行なったりした、がそのあとから、マンは発言している。

マンの戦争に対する態度には、他の多くの芸術家たちにくらべるとはるかに熱狂的なところが少ないことは、注目に価する。マンの問題にしているのは現実の帝国主義戦争ではなかった。それはひどく哲学的文学的なもので、ロマン的で反動的な文化と天才——これがドイツ的だとマンはいう——に対する文明と精神とのたたかい、というのがその図式である。当時のマンによれば芸術は徹頭徹尾啓蒙とは正反対の反動的立場に立つものである。「芸術は進歩や啓蒙、社会契約の気安め、つまり人類の文明化に興味を寄せるものでは全くない。芸術のヒュー

マニズムは徹頭徹尾本質的に非政治的なものであり、芸術は国家形態や社会形態とは全然無関係に生まれるものである。芸術にとってはファナチズムや迷信が邪魔になったためしはないし、芸術は理性や精神よりも情熱や自然を相手に極めてしつくりした関係を結ぶものである。芸術は革命的な身振りをみせることがあっても、それはエレメンタールなやり方でそうするのであって、進歩の意味でそうするのではない。」だから、芸術はいくらでも戦争と結びつく。文学的に愛好されたアンチテーゼ、市民対芸術家、芸術家対ジプシーというのはロマンチックな伝統だったが、安全第一主義の文明家に対して芸術家は道德的ラジカリズムをことんまで押進め、危険と深淵を恐れず、心身の力を投入するから好戦的でもあり、今日のアンチテーゼはむしろ「文明家対兵士」である。社会民主党が軍部と友好関係に立ったのも、かれらが熱狂的な帝国主義者だったからではなく、かれらが政治家がある以上にモラリストだったからだ。そうマンはいっている。平和の世界、それはカンカン踊の文化であり、文明の分解的要素で発酵し、悪息を放つ、いやらしい世界だった。これに対し、「試煉であり教化である」「戦争は浄化であり解放である。」「芸術家、兵士の内なる芸術家が、かれのすっかり飽きた世界が崩壊するのを、神に感謝しないわけがあらうか。」とマンは平気で、丁度マルヌでドイツの作戦計画がボロを出しはじめた頃、書いていた。

ばかりか、この『戦時随想』という「軍務」に続く『フリードリヒと一七五六年の大同盟』では、マンはドイツ軍のベルギー侵入を「フリードリヒのザクセン侵入とバラレルなもの」とみて正当化し、「ぎりぎりの正当防衛」とさえ呼んでいる。いくらこのフリードリヒが、偉大な国王として描かれたり、英雄的に美化されたりしてはいず、憑かれた人間、傷悴しきった男、宗教ぎらい女ぎらいで意地の悪いベシミストとして、イローニッシュに描かれている——そしてそのためマンは右翼から攻撃を受けた——とはいえ、マンはここで歴史歪曲の

デマゴギーに力をかしていることは否定できない。ドイツ国民は他国民よりも「思想家と詩人の国民」だといって、一九一四年の大同盟を一七五六年の大同盟から説明するマンのエッセイは、「愛国的な学校教科書でさえ今ではもう許容されないようなぼろぼろのアネクドートの寄せ集め」(メーリング)である点之余りに目立ち、とうていその幻想の「機智」をばくらは、あるいはばくは「楽しむ」というわけにはいかない。

もちろんマンはかつて『ブッデンブローク家』であれほど痛烈に戯画化してみせたプロイセン的精勤主義——ハノオ少年の学ぶギムナジウム、とりわけウリッケ校長——へ転向したわけではなく、その意味ではこの時期のマンもかれなりに首尾一貫しており、変っていないにちがいない。「わたしには、プロイセン主義は、政治的にみればこの戦争が終れば過去のものになってしまうこと、それはドイツの将来——その偉大さと確実性をわたしは疑わない——には本質的に何の關係もないものとなること、よくわかっている。プロイセン主義は疑いもなくドイツ的課題をはたしたのであって、今日では克服される運命にある。」とマンは当時の私信でいつている。『考察』以前から一応マンは過去の世界への訣別という態度をとっているし、後の政治的転向のきざしは早くもここに見えている。

戦争を肯定し、歓迎し、歌った作家や詩人たち——あらゆるニュアンスの相違やその動機を無視すれば、マンはまさにその一人だ——の政治的・文学的立場に反対する作家たちもいた。そのひとつはルネ・シッケレの編集する『白紙』に集る、マンよりも一世代若いいわゆる表現主義の作家たちだった。ところがかれらの「革命的言辭」こそはマンに「恐怖をよびおこした」。「なぜなら、これによって国民はひどく自信を失い、動揺させられてしまいうからだ。しかしそういうことは——ドイツとヨーロッパの未来のために——あってはならない。」そう考えていたマンに与えられたのが、『白紙』上に発表された——こともあろうに——兄ハインリッヒのゾラ

論だった。トーマス同様、歴史のコスチュームをまとうて時事問題を扱うこのエッセイは、声高らかにデモクラシーを讃え、戦争を断罪するものだった。ハインリッヒの扱うルイ・ボナパルトの帝国はじつは誰がみても「命令と服従の」ヴィルヘルム体制だった。「権力とは、それが正義でないとき、何だというのだ」とハインリッヒはいい、プロイセン精神に対してゾラを、自由と真理と正義の擁護者ゾラを引合いに出している。マンはこの論文のなかで用いられている多くのことは自分に対する直接の攻撃だと感じた。(一五年一月発表された論文をマンは一六年の初めになって読んでいる。)この論文を読んだマンが感じとったものをぼくらはいま『考察』にうかがうことができる。『考察』はハインリッヒの論文に対するおびただしいアンチテーゼを逐一打ち立てている。ハインリッヒのテーゼはトーマスによって、一語一語文字通りまともに受けとめられ、猛烈な情熱的告白となっている。まさにこれは、マン兄弟の、そしてまたそれ以上にトーマス・マン自身の内部における「兄弟喧嘩」だった。

マンを「保守主義者」とみること、『考察』のマンを反動とみることがあながちまちがいとはいえない。けれども、それをいうためには何に対する反動かを示す基準が必要であり、「マンはデモクラシーに反対だといった」だからマンは反動だといってすませてしまうわけにはいかない。マンがどういう風に反動であるか、その反動的性格は何かは、しばしばあいまいである。ハインリッヒやいわゆる表現主義者たちとくらべられる『考察』のマンが実際に以上に反動的に見えるのは、そのレットルのためにすぎない。『考察』のマンは決してデモクラシー一般に反対しているわけではなく、「文明の文士」の主張するデモクラシーに反対しているにすぎない。『ドイツ共和国について』のマンが現実存在するデモクラシーに対するリアルな体験をふまえているのに対して、『考察』のマンは、同じデモクラシーということばをつかっている、何らリアルな政治を考えていないことは見逃

せない。『考察』の時期のマンは、「政治」とか「デモクラシー」とかいつても、全然現実の社会的行為である政治を念頭においてはいいないし、政治制度としての、或いは政治運動としてのデモクラシーも全くかれの念頭にはない。政治権力の問題もなければ、資本主義経済の分析もなく、法律や行政機構の役割、政党や組織の運動や理論の考察など何ひとつあるわけではない。また戦争の原因ひとつ分析できてはいない。ハインリッヒのばあい、かれのデモクラシーが「フランス革命的修辭学という一種のレトリックからとり出したばかりのほやほやで、これこそいまのドイツ人に絶対よく利く薬だといって提供された急進的原理のとてもない化物」(ゾントハイマー)だったとすれば、トーマスのばあいも似たりよったりで、政治の概念をハインリッヒ流の文学から借りてきて、政治＝デモクラシーなどというばかげた主張を行なっている。いったい当時ドイツのどこにマンが叩かなければならないデモクラシー政治があったというのか。帝国政府の行なう権力政治は有名無実だったとでもいうのか。要するにデモクラシーはマン兄弟のばあい全然政治の問題ではなく、「精神」だった。論争は政治論争ではなく、文学論争にすぎない。だから、いくらマンが『考察』でナショナルなドイツ市民性をたたえてみたところで、それは直接にはプロイセンの保守主義政治やヴェルムの帝国主義と何ら一致するところはない。それは丁度ハインリッヒらの文明の文士の唱える政治が当時のSPや自由労働組合の政策と何ら一致するものでなかったのと好一対である。マンが『考察』で必死になって拒否し、軽蔑しようとしているのは政治としてのデモクラシーではなく、デモクラシーの理念、というよりはデモクラシーの文学的・抽象的カリカチュアみたいなものにすぎない。ハインリッヒ対トーマスという二者択一は、見せかけにすぎず、ぼくらがまじめにとることができ、そしてとらねばならぬ政治の問題ではない。そう一応はいえる。だから、その意味では、今日でも読者が、マンは政治を軽蔑し、デモクラシーに反対したというだけで、『考察』のマンのいう「デモクラシー」や「政治」が何を意

味しているのかも具体的に考察することなく、腹を立ててみたり、ひどいばあいには、左翼に対するルサンチマンや反撥から、『考察』に感情移入して有頂天になったりしているのは全くの喜劇というほかはない。ゲルマニストとかマン研究家とか称して、この喜劇を演ずる大根役者のコメディアンはまだまだ跡をたたないようだ。

ぼくらが本当に相手にしなければならないのはいつのばあいも政治権力であって、文士や作家ではない。どれほど作家や文士や、ましてや大学教授などが政治に便乗したところで、政府の太鼓をいくら叩いたところで、恐るるには足りない。政治権力は作家や文士を利用するだろうし、みこしに乗せて担ぐこともあろう。けれども、それは政治権力の問題である。とはいえ、文士や作家や学者の良心の問題をそこから切離すことはできない。文学をとり上げる以上、これを問題にしないことはナンセンスであろう。じじつこの時代こそは文学を政治から切離すことができなかった時代であり、政治を相手にしなければならなかった時代だった。だから誰よりもくそまじめにマンは政治をまともに相手にしたのだ。けれども、そのばあい、知識人であるマンに政治が問題になりえたのは、政治が、かつてニイチェが相手にして散々な嘲弄を浴びせていた愚劣な権力政治ではなく、ニイチェの知らなかった政治、「精神」というかたちをとって、はじめて出現してきた政治だったからだ。ここに『考察』のマンのジレンマがあった。

政治といえばデモクラシーにきまっている、といっていたマンは、デモクラシーつまり精神としての政治以外の政治など全く念頭にさえなかった。そんな政治がたえあったところで、相手にし、問題にするにも足りない。「たかをくくって」いたのだ。これを、理想主義と呼ぶべきだろうか、それとも無知と呼ぶべきだろうか。マンの相手は帝国政府でもなければ独占資本でもなく、「文明の文士」——精神の政治化を説き、文学を政治的進歩と社会改革とデモクラシーのプロパガンダにしようとするタイプの芸術家、政治的啓蒙主義者、博愛主義者——

だった。理性、真理、正義、自由、人間性、……ああ何たる美辞麗句！ああ概念！——といってマンはゲーテを引用する。「一般的概念と大きな自惚れは、やがて常に恐るべき不幸をもたらす。」——こういう独善的態度から生まれるものは常に偽善であり、良心の麻痺だけだ……。とマンはいっている。

この時代のマンと一見よく似たようなことをぼくらの周りでも例えば竹山道雄や福田恒存などがやっている。マンの『考察』もことによると竹山らの「進歩派平和屋」批判と同じように読まれているかも知れない。けれども、ここには大きな時代の相違と主体的な質のちがひがある。竹山らの方法は、一口にいえば、マルクス主義を受容する日本の知識階級の特種性に焦点を合わせ、そこから批判対象を批判する一種の意識的な迂回作戦とみていい。かれらの「良識」は権力そのものに向わず、権力とのたたかひにぶざまに敗れたものに向うのだ。マンのばあいもこれと似ていないこともない。しかし竹山らのばあいと、マンのばあいを同日に論ずることはできない。戦争といえば普仏戦争の、せいぜい塹壕戦のイメージしかなく、第一次大戦の非人道的な大量殺戮、戦車や飛行機はおろか毒ガスまでもでてこようとは思ってもいなかったマンと、広島、アウシュヴィッツのあとのぼくらとは時代がちがうのだ。かつてマンの悲喜劇であったものは、いま竹山らの醜惡な田舎芝居となる。質のことは、いまふれる必要はないだろう。

マンと「文明の文士」の問題に戻っていえば、マン自身誰よりも「文士」だったことは、みるひとが盲でなければ、『考察』以前のマンの著作から明らかである。青年時代から、素朴でなく感傷の、無邪気でなく主知主義の、自然ではなく精神の作家、「文士」だったのがマンだ。

マンは「詩人」を讚美し「文士」を輕蔑するドイツの伝統的な物の考え方に対立していた。「詩人はボレーミカーであつてはならず、靜謐、高貴、單純さをもつて現象を受け容れ、それを讚美すべきだ」という見解がドイツ

人の心の奥底にはしみついている。」こういう詩人の役割と現実との関係に関するドイツ的な理解の背後には、世界と現実がそれ自体卑俗なものであり、これに介入する詩人はみずからを卑俗なものにする、という見解をみとめることができる、とマンは二〇年代の終りにもいつている。ドイツではマーリングの指摘しているように、三月革命の挫折の後に、市民的文学が社会に背を向け、「芸術への復帰」への道を歩むようになり、ドイツに特有の、詩人と文士という不毛なカテゴリーの分裂がそこから生まれたのであろうが、それをいわばみずからのパッションとして、『ドイツへの悩み』として背負ったのがマンだった。だからこそ、マンはドイツ人たちの間でカリスマ的詩人として迎えられたことがなく——ハウプトマンのような劇作家が共和国の時代に市民階級の間でアウラに包まれていたのに対し——あくまでよそよそしく、冷く迎えられたのだ。マンがどれほど一般の読者の間でもとより、作家や詩人たちの間でも孤立した存在であったか、これは驚くべき事実である。

マンとハインリッヒらとのちがいが、それは右にのべたようにほとんどなきにひとしいものだった。『考察』でいうとおり、これまでマンの書いたものはハインリッヒ流の「デモクラシーに寄与している」ものだった。ハインリッヒ流の表現主義者たちとマンの立場ははじめはじつは余り違ったものではなかったのだ。敗戦はもう目に見えている時期にマンは『考察』を、ドイツの敗北を強調する表現主義的政治文学の四面楚歌の中で、まさにかれらを相手に書いたわけだが、これは途方もないドンキホーテ的行為であり、全く骨折り損のくたびれもうけだった。その意味では時局便乗どころではなかった。

ところが、間もなく『考察』は、現実には著者の意図とは全く別に、深遠な反デモクラシーの思想の書物ということになり、ワイマル共和国の中を独り歩きするようになった。例えばハーヴェンシュタインというゲルマニストは鈍感にも二七年にこう書いている。「いまなお、われわれの——トーマス・マン自身も決して予期しな

った——敗北の後でも、そしてマンがドイツ共和国と和解し、ばかりかその代弁者にまでなった今日でも、かれが不倶戴天の敵に対して行なった精力的なドイツ擁護を読むことは大いに必要であり、有益である。なぜなら、われわれは外面的には敗北したし、おそらく長きにわたって無力化されるであろうから、精神的道義的にわれわれの敵——かれらは今日でも相変らず敵である——に対する防戦を行ない、自己主張を行なわなければならない。この戦いのために『非政治的人間の考察』の好戦的な著者は、われわれに内容の充実した武器庫を提供してくれている。これ以上有力な武器庫はほかにはないであろう。もし敗戦の結果が、われわれを暗示にかけ、われわれの過去への追憶を曇らせ、われわれ自身やわれわれの歴史に対する信義を破ろうとするならば——その危険はいまだ大きいのだ——この書物は（……フリードリッヒ論文と同様……）祖国のための反抗と祖国への信頼を強めてくれるであろう……」。

こういう読者を相手にしたマンは黙っているわけにはいかなかった。今まで文学的ラジカリズムという形でしか知らなかったデモクラシーは、現実接してみると挑戦しなければならぬような厭わしい反文化的なものではなく、煽動家狩りの時代にくらべれば芸術にとってもはるかに自由なものであることがわかったからだ、とマンはあっさりいって、ワイマル共和国弁護をはじめた。これは読者に対する挑撥も同然だった。

しかし主体的にはどうであろうと、客観的にはハーヴェンシュタインの読んだように『考察』が読まれたこと、ワイマル共和国のなかでドイツの読者の反動的な志向を強めるのに一役買ったであろうこと、これを否定することはできない。

じじつマンは『考察』に例えばこんなことを書いているのだ。「危機の時代にはひとと自己を識ることを学び、最も奥深いものをあまた思い出し、自己を国民的に意識する。窮迫の時代に自己否定があればそれは憫むべき弱

さであろうから、そしてかような時代には自己認識と自己主張はひとつであり、ひとつであらざるをえないから、じぶん自身を意識することから自己確信へ、戦争の喜びそのものへ、非個人的な誇りへ、『愛国心』へ到るまでには一步の間隔もない……」

こういう箇所を拾い出すだけで『考察』をきめつけ、判定するわけにはいかないが、逆に、マンの歴史的認識は正しかった、それは今日のドゴール政策の先駆である、と本気で讃美しているM・フリンカーのような御用学者の書物が立派に出版されている現在、マンの誤謬はあくまで誤謬として確認しておくことがやはり必要であろう。「ドイツの指導者は国政をとるのが無器用だったかも知れない。外国との交渉では無作法で、相手を傷つけるようなことばをつかい、相手を傷つけるような態度をとったかも知れない。とりわけドイツは脂ぎった卑怯な国だ、相手が強大な同盟をつくるとみたらどんなばあいも戦争のために立上るようなことはない、というような致命的な印象を与えたかも知れない。……しかし本質的なことになる、国家の方向と目的に関することになる、かれらはドイツを正しい方向へ、つまり帝国主義的方向へ導いてきた。——この方向は、新たにビスマルク以上の指導者が現われはしなかったとはいえ、おそらく『古くからの権利』をもつ諸外国との衝突をもたらさないわけにはいかなかった。このような指導に従う国民の意志に著しい攻撃性がないと錯覚するのは愚鈍にすぎる。この攻撃性を否定すべきではないし、ドイツ民族はちっぽけな土地で安穩としてキャベツでもつくるよりもましなことは何ひとつ望まない民族だなどと考えてもらっては困る……一九一四年夏の決起、あれは信念の、とことんまでやる覚悟をもった決起だった……あれが危機だったのか。そうだ。瞬間のバトスであった。しかし危機とは、われわれがロラン氏に教えてあげたように、ひからびた『必然』^{ネンテ}でもなければ絶望のやけくそでもない。危機とは創造的な感動を莊重に呼び表わしたことばであり、この感動のなかでは防禦の要素と攻撃の要素とは

分ちがたく一体化している。だからこそ呼びかけられなくても国民は決起するのだ、何百万もの若い人々が武器をとって立上るのだ。国民は、ふつう平和以外の何物も望まず、ずるい『支配者』にだまされてはじめて法を犯し、兇行に走るものであるのに、そうするのだ。強大な体力を貯え、名譽心の泉から心ゆくまで飲んで渴をいやしたわが精神の世界民族は、いまや世界民族に、神の召すがままに、現実の世界民族にならうとする。必要とあらば（そして明らかに必要なだから）力づくでの突破を行なうことによってそれを行う。スペインやフランス、イギリスもそれぞれにかつて世界史上で脚光を浴びたではないか。戦争が勃発したとき、ドイツは今こそ自分の時がきた、試錬と偉大さの時がきたのだと、情熱的に信じた。今日これを否定し、『目前に迫った惨事に対する恐怖』などと饒舌をたたくのは嘘をつくものである。ドイツ国民、国民として徹頭徹尾英雄的な精神をもち、責任感にあふれ、道德的偽善が嫌いなこの国民は、それなりにラジカルで残酷な敵に生命を脅されようと、決して泣言をいわないし、またこの国民は正当防衛にあたつて革命的な手段にうったえることも躊躇せず、かような手段をとることを余りに当然だと考えてきた。ドイツの国民はベルギー侵入を正当だとみなし、この侵入で非難されるべき点があるとすれば、それは宰相が、これは不正行為かも知れない、と述べただけだとみなしてきただ。」ドイツの国民はイギリス商船ルンタニア号の撃沈を正当とみなし、無制限潜水艦作戦を正当とみなした……とマンは書いている。こういう言葉を読んで啞然としない読者があるだろうか。こういういやがらせのことばがヴェルサイユ体制に不満を抱く国民のあいだで好んで読まれたのだ。ワイマル共和国時代の、デモクラシーと共和国に反対した知識人たちが意識的無意識的にナチズムを導いたことは周知の事実であるが、こういうことばを口にした以上マンも結果的にはかれらの一人に数えられはしないだろうか。文化や民族は^{アリストクラチック}で、文明や国民ないし大衆は^{マツ}デモクラチックな概念であり、デモクラシーは非ドイツ的である。とマンはいい、

「ドイツ民族は、政治そのものを愛しえないという簡単な理由によって、断じて政治的テモクラシーを愛するとはできない」とわたしは確信する。悪名高い『官憲国家』こそドイツ民族にうってつけの、かれらがほんとうに望んでいる国家形態であるし、永久にそうであらう。」とマンはいつている。

いかに『考察』の時代にはまだ政治を口にしながらも現実の政治を念頭においていなかったとはいえ、帝国主義戦争の本質をみなかったマンの立場は、政治的に誤りであったこと、それを否定することはできない。文学が政治と無関係でありえないかぎり、これはたしかに文学的にも致命的な誤りだった。

いったい、マンがこれほどまでに誤りを犯しえたのはなぜだろうか。

「じぶんはどうかといえば、私は受理し、学び、協調を求め、自分を修正することはできる——が、私の本質と私の教育を変えることはできない、私の根を引き抜いて他の場所へ埋めることはできない、と悟らざるをえない。」とマン自身はいつている。マンは、そしてぼくらは、ここから何を学ぶだろうか。

マンの政治的誤謬は、ドイツの歴史と社会に分かちがたく結びついている。マンの『考察』はドイツの文化的発展および政治的社会的な歪んだ発展を抜きにして考えられるものではない。

ルカーチも、マンの政治的誤謬は、四八年の悲劇と七〇年の悲喜劇によって反動的に出現し必然的反動的に発展していったプロイセン・ドイツ帝国権力に対するドイツ・インテリゲンツィアの降伏の歴史ときりはなせないこと、「権力に擁護された内面性」がマンの出立を規定していたためであることを指摘している。マンの世界は、ラブレールからロベスピエールに至るまでの、進歩的人間発展の大きな公的・政治的・社会的・文化的任務であった諸理想が時代のたたかいとの連関を失い、このたたかいに前進的影響力を与ええないばかりか、前進の障害となり、保守的偽善の武器と成り果てた世界であった。そういう世界の矛盾を極端にまで追究する過程に、生まれ

るべくして生まれてきたのが、このマンの『考察』である、という風にルカーチは考えている。

マンがなぜナシヨナリズムに足をとられたのか、という問題は、ドイツの近代国家形成と発展の歴史的事情を顧慮しないでは、到底理解できない、とほくも考えている。イギリスやフランスとはちがつてドイツのナシヨナルな統一はデモクラシーの合言葉によらず、その犠牲において行われた。ドイツの統一は徹底的に君主制の原理に魂を売り、デモクラシーの擡頭を鼻先であしらったあのビスマルクの政治によってやっと獲得された。しかも、巧妙にそこには近代国家としての一応の私的自治の原理が建前としては約束されていた。相対的にはリベラルで折衷的な面があった。個人的・私的、あるいは「文化」的な「自由」の余地がかなり残されていた。

もちろん、ドイツ帝国が国民の国家、民衆のための国家ではなかったことは、社会主義者鎮圧法や顛覆防止法をはじめとするさまざまな弾圧政策を引合いに出すまでもなく、明らかである。周知のようにプロイセンは、大戦まで非民主的な三階級選挙制を維持していたし、デモクラシー弾圧の口実には一切不自由しなかった。ことによると、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』こそはこの口実の最終的表現ではないだろうか。

かつてビスマルクの国家体制の「服従」「義務」「祖国愛」といった「英雄型に矛盾する諸徳」を徹底的に嘲弄し、もう一方でまた「客観性」「批判精神」「献身」「愛」といった西欧的諸徳に、シニカルな嘲笑を浴びせていたのはニイチェであるが、イイチェのばあいと同様、大戦中のマンのプロテストも西欧的ブルジョワデモクラシーに伴う政治の偽善性、調和の意識の自己偽瞞性（ここでは大戦は「国際秩序」と「法の支配」の問題になる）を暴露するかぎりでは、現実の場においても、これがまるきりの的はずれだったとはいいたい。

けれども、そこから「国家」の「神聖な利己主義」を不敵に肯定するシーズムは、この上もない破廉恥な頹廢に通ずる。ドイツに特有の、ニイチェあるいはカントの、余りに潔癖な倫理性は、獣性むきだしの露骨なファシ

ズムの権力肯定と、まさにぴたり背中合わせになるのだ。後にマンが『ドクトル・ファウストス』の主題として真向からとり上げたものはまさにこれである。

そういう危険を、この時代のマンはまだ見のがしていた。精神的な生活と国家との分離を認めることがドイツ的であり、リベラルであるとマンは繰返し『考察』でいつている。しかし、精神的な生活と国家との分離を認めながら国家権力の行なう戦争を弁護することはすでにそれだけでも論理的にも矛盾ではないだろうか。国家とその権力の起源を全然問題にしないことは、その起源の隠蔽と忘却をはかることがまさに国家の政治的本質である以上、やはりこれに力をかす政治的行為となりはしないだろうか。いくら夜警国家はまだリベリズムに活動の余地を与えていたといっても、その国家権力は現実には何よりも資本の活動をまもり、労働力商品を確保するための後盾であつたろうから、そういうことを無視するのは、最善のばあいでも、まるっきりの空想的な立場ではない。そういわれてもしかたがあるまい。

後年マンは『ファウスト博士』で、伝記作者ツァイトブルーム——この人物の政治的見解やロシア革命への傾倒は、じぶんの見解と一致するとマン自身告白している——の口をかりて、次のようにじぶんの客観的な、しかしそれ以上におそらく自己批判のフィルターのかかった、政治的見解を表明している。

「権利と法、人権保護令、自由と人間の尊厳はわが国ではかなり重んぜられていた。ほんとうは軍人らしいところがなく全く戦争向きでなくせに、踊らされコメディアン振りを発輝していた皇帝の行なう圧制はわれわれには苦痛だった。——が、かれの文化に対する態度は時代遅れの愚物のそれであつた。またかれの文化に対する影響力は空虚な譴責の身振りをとるだけがせい一杯だった。文化は自由であり、かなりの高さをもっていた。そしてだいたい以前から、国家権力に対する完全な無関係に慣れていた。だから文化を支持する青年たちは、丁度勃

発した民族戦争を、そのなかでは国家と文化が一体となる新しい生活形態への打開とみたのだ。このばあいにはもちろん、いつもわが国ではそうだが、一種の奇妙な自己偏執、全く素朴なエゴイズムが支配的だった。このエゴイズムは、ドイツの生成過程（われわれは絶えず生成する国民だから）のためには、すでに完成した、決して破局的運動には夢中にならない世界全体がわれわれと共に血を流さなければならないということも、別に問題とせず、ばかりか、それを全く自明のこととみなすものだった。われわれのこういう態度は外国には不愉快なものとみなされるが、そうみられるのも必ずしも不当であるとはいえない。なぜなら、道徳的にみれば、国民がより高度の共同体的の形態へと打開するためにとるための手段は、——そのために血が流されなければならないならば——外へ、向つての戦争ではなく、内乱であるべきだからだ。」（傍点——林）

けれどもこれをそっくりそのまま第一次大戦と革命時代のマンの政治的見解とみることにはちょっとできないし、まして当時のマンの政治的立場の表現であるとは不可能である。

戦前戦後を通じてマンは引続いてミュンヘンに住んでいた。『ドクトル・ファウストス』にもマンは大戦前の「文化の中心」であった美しいミュンヘンのことを書いている。「フーバーの吹くアルプスの碧空の下、涙流が流れる宏大な町のいかにも村めいたたたずまい」をながながと描写している。「政治的な問題は、半ば分離派的な民族カトリックと、帝国支持の信仰を告白する潑刺たる自由主義という面白い対照でしかなかったミュンヘン。將軍会堂で衛兵交代演奏会が行なわれ、美術商や豪壮な装飾店が軒を並べ、季節ごとに展覧会が催され、カーニバルには農民舞踏会が行なわれ、メルツェン・ビールに大酔し、オクトーヴァー・ヴィーゼでは数週間にあたつて大市が開かれ、そのときには、今では近代的な集団企業によつてとくにそこなわれてしまった大胆で陽気な民衆精神がザトゥルン神の祭を祝う町ミュンヘン。ワグナー流が残っており、俳他のな秘密団体のひとびとが

凱旋門のうしろで美的な夕祭を催し、市民の好意に安臥して心からのんびりしているボヘミアンがたむろしているミュンヘン」である。

「反対にマンが描いていないのは、ドイツ国内のどこよりも革命勢力と反動がはげくしぶつかり合ったミュンヘンである。一一月革命から二〇年のカップ一揆までの一年半、バイエルンは政治的転変のつぼだったはずである。USP政権を率いたアイスナーの暗殺とSPのホフマン内閣。樹立されたがたちまちホフマンの軍隊に襲われたミューザームやトラーによるレーテ共和国とこの後をうけたKPの評議会。ノスケの指令による義勇軍の侵入……。ドイツ全土の革命においてどこよりもいち早くその例を示したのはおそらくミュンヘンであったが、徹底した反革命を提供したのもバイエルンだった。二〇年のベルリンのカップ一揆——それはあの歴史的ゼネストによって壊滅させられたが——と呼応したクーデタによって「あくまで合法的に」政権をにぎったのは例のフォン・カール内閣であるが、この反動政権と軍司令部の密かな支持の下におかれたバイエルンが共和国の「カトリック民主主義の時代」（二〇〜二二年）には反動勢力の牙城となり、ナチスの温床となったことも余りに有名である。すでにドイツ労働者党の例の二五条は二〇年二月に発表されているし、同年夏までに党名を国家主義ドイツ労働者党と改めたヒトラーは、翌年「フューラー・プリンツィープ」を打立て、既成組織をSAと改名している。かれらがホーフブローイハウスでKP党員を相手に行なった乱闘も二一年の秋だった。「秩序の小堂」と呼ばれたバイエルンはどこよりも白昼堂々と白色テロが支配し、左翼に対する弾圧は暴虐を極わめ、「人民裁判」による政治犯の裁判や東方ユダヤ人、外国籍労働者の追放が行なわれた。ルール占領とインフレーションの時代のバイエルンに至っては、バイエルンの反動勢力はもうワイマル体制そのものを脅かす存在だった。シュトレーゼマンに乱暴な武断政策をとらせ、種々の独裁的強制措置や純然たる法律侵犯を行わせ、ドイツの議会主義的

合法性を空洞化させたのはミュンヘンだったし、二三年末、右翼と將軍の中で孤立したシュトレゼマンは本気でミュンヘンの反革命と自分の死を覚悟したほどだったとアルトウル・ローゼンベルクはいつている。

マンはこれら一切をつぶさにじぶんの眼で見たはずである。

けれども意外なことに、われわれが現在マンの当時の作品（一九九年に出ているのはこともあろうに『幼児の歌』と『主人と犬』だ）やエッセイはもとより、書簡からも読みとることができるのは、こういう政治的事件に対する、反応はおろか、犯罪的ともいふべき沈黙である。

現在の書簡集は不完全なものにすぎず、今後新しい書簡や死後二〇年経ったら開封されるといういわくつきの日記も出てくるだろうから、本当のところはわからないが、少くとも現在の資料で判断するかぎりでは、マンは政治的状況に対して全くの、故意の沈黙を守っていたとしか考えられない。

その一、一九九年五月一二日ヴィトコップ宛。ミュンヘンが交通封鎖されたため郵便が滞り、その後が忙しくなったことを訴えた後、マンは例のトラーの弁護によってかれの家庭が革命軍からまもられた事情を次のようなことばで説明する。「ひどいものでした。しかしわれわれは無事です。わたしたち一家は動乱のなかを殆ど何ら煩わされることもなく切抜けることができました、ばかりか頭数が一人ふえました。……」そしてマンは生まれたじぶんの子供のことを長々と書いている。

その二、二〇〇年三月一六日、ベルトラム宛。「むろんいまは政治的には不穩状態です。どこもストライキで、交通は遮断されています。残念ですがでもきつとこれもしかたがないでしょう。これらの事件についての御意見を伺いたいものです。独裁者カップはあなた御自身にもあまり望ましいものではないでしょう。全体的には、わたしは現在の権力者たちのある種の傾向には共感をもってはいるもの（「名誉と誠実さ」をかれらはつくり

出そうとしています——ブラヴォー！、この傾向は時機尚早で、事態の静かな歩みを乱す行為だという印象を抱きますし、折角根を生やしはじめた保守的イデーがだいなしにされてしまうのではないかと、おそれています。クーデタを起した連中は明らかにかれらの勢力拡大を過大評価しています。かれらはこれまでの政權に対して全民衆が立ち上ってくれると計算していたのですが、どうやらわたしのみるところ、そうはならなかったようです。組織された社会主義ばかりでなく、議会主義、デモクラシーもこぞってクーデタを起した連中に対抗しています。——しかしほんとうの民衆の意向は見極め難いものがあります。民衆はみじめですし、今後もみじめでしょう。ミュンヘンの保守政權が、食堂や音楽レストランを閉鎖させたことを、わたしの子供たちは今日、食事の折デマゴギーだと解釈していました。わたしは否定することはできませんでした。ただ、合法的でない権力者が必ずデマゴギーだというわけにはいかないし、どれほど端正な処置でも、そういう解釈は免れえないにちがいない、とだけいつておきました。ドイツ人が国王たちを追払ったことが、どれほど幸福であるかは今完全にわかりますが、どれほど不幸であるかはまだ全然わからないことです。」

その三、二二年七月八日ベルトラム宛。「あなたは手紙で政治にふれておられました。こちらはいま救いようもない混乱です。社会主義者たちは、例外法を！と叫んでいますし、保守主義者たちはデモクラシーの崩壊を嘆いています。ラテナウの暗殺はわたしにとってもひどいショックでした。あの野蛮な連中、あるいはあの理想主義にくるった連中の頭は何と蒙昧なことでしょう。次第にわたしは歴史の危険を見抜くことができてきています。歴史のみせかけだけのアナロジーのため、状況の唯一性が不明確にされ、若い世代には狂気へと誘惑されている人々が少くありません。わたしはドイツの相貌が歪められているのに悩んでおります。わたしはハウプトマンの生誕講演の論文を一種のマニフェストにしたて上げ、そのなかで聴衆の若いひとびとの良心に訴えようと考

えております。わたしは『考察』を否定しませんし、若いひとびとに向って、社会主義とかデモクラシーのような、かれらが内面的にそれを越えているような事柄について、かれらの感激を求めることは誰よりも苦手です。しかしわたしはまえに機械的な反動をかつて感傷的野蛮さと呼んだことがあります。新しいヒューマニズムは、古いドイツの地盤よりもデモクラシーの地盤の上の方が根を生やすことができます。……」

こういうことばが、歴史的社会的事件についてのマンの見解発表のほとんどすべてである。マンは、一月革命やロシア革命について、非常な関心を抱きながら、なぜかその意味はむろんのこと、事件そのものについても、極端に沈黙を守っている。四七年にも、ロシア革命以後の東西の分裂と発展については「深く沈黙を守ることがわたしの立場です」と私信でいっている。沈黙や不作為はそれなりにひとつの政治的行為、コミットメントとなることをマンが知らなかったわけではあるまい。マンは黙殺しようとしたのだとしか考えようがない。

しかし一方ではたとえば『魔の山』のナフター——この作中人物の構想を「考察」や私信でマンは語っており、注目すべきことにそれは戦中以前のものであるが、実際の執筆の時期は二二年春から二四年九月とみられる——は安全第一の市民社会を軽蔑し、「絶対命令、絶対服従、個性の抑圧」を教育の目的とし、「時代が要求する独裁とテロル」を説く人物、「市民的自由主義を後方から突く」「革命後の反革命の保守主義者」、一種のファシストであるが、マンはナフターの背後に明らかにロシア革命をみている。この頃、マン自身に革命と反革命の区別がどこまでついてたのか疑わしい。『ゲーテとトルストイ』の第二版（二二年）でも、マンは「トルストイの国で行なわれた大変革のうちに表面的に認められる西方的マルクス主義的色彩にもかかわらず、われわれはロシアのヨーロッパ的時代、西方的、自由主義時代……は終焉を告げたといった差支えないようだ。そしてロシアはこの革命と共に再び面を東に向けたのだ……」といっている。

けれども少くとも二〇年代後半以後には、マンは社会主義革命を承認していることはある。例えば『パリ訪問始末記』（二六年）でマンが身近の一亡命者が革命の「実験」で流された血のおびたしさを訴えたのに対して、『ブルジョワのつくり出した世界大戦の人間殺戮』はそれとは比較にならないことをいい、「わたしも『市民』である——おせっかい屋たちは毎日のようにわたしにそういつてきかせてくれている——、が今日市民的なものが歴史的にどういう状態にあるかを認識することは、市民的生活様式から脱却すること、新たな約束に眼を向けることを意味しているのだ。」というような発言はその証拠である。

後年、スターリニズムとマッカーシズムの時代にふたたび（『わたしの時代』）、ロシアで社会主義革命が行なわれたことは「悲劇的」だった。「ロシア的、つまり専制政治と革命が結果において手を握り合つて」「世界救済を呼号する革命」「全体主義」の革命だったとマンがいつているのは、今問題にしなくてもいいだろう。しかし、「マルクスとヘルダーリンの出会い」（二二年）をいい、ファシズム時代には再三マルクスをニイチェと並べてその理想主義の高貴さを訴えているマンではあるが、社会主義に対するマンのかかわりかたにはずいぶんあいまいでいかがわしいところがあることは否定できない。とてもルカーチなどのように「マンの文学は世界観から純文学的形式賦予にいたるまで前進の不断の流れであり、……のみならず、マンはデモクラシーに方向をかえてからは労働者と共に歩もうと努めた」という風にすんなりとはいかない。ルカーチは、マンがたたかう市民を描いていないのは「トーマス・マンの非妥協的な芸術家としての誠実さが、ドイツの市民的現実が存在していないものは何であれ、描くことを許さなかった」からだといっている。けれども、「一九一九年一月一日、ローザ・ルクセンブルクの頭蓋を打ち砕いた銃床は、アウシュヴィッツへの道を開いた」（ザイフルト）ことを少くとも当時のマンは認識しえなかった。ルカーチの考えているように、どれほどファウスト的意志と能力をもち、

包括的な立場をとった大リアリズム作家であっても、マンは結局歴史の中で状況変革の行動をとる人間を全く描いていない（マリオやシュヴァイゲンシュティルをそういう人間とみることとはできない）。このことは上述のようなマンの幾多の発言や沈黙からも容易に推測されるだろう。その意味でマンをルカーチ流に「時代の鏡」ということには余りに無理がある。

けれどもぼくらがトーマス・マンのような作家を相手にしてあまりに性急な教訓を出したり政治主義的結論を下すことは、たとえ善意からでも、一つのつまづきになるかも知れない。ぼくらがぼくらの今日到達した一定の歴史的知識、ぼくらが立っている価値の基準、そういったものを当然の前提として、極めて安全な地帯から、大戦中のマンの誤謬を指摘し、あるいは共和国時代のマンの政治的立場を肯定し、政治的未熟さ、その中途半端な知識を笑い、焦燥のあまりさかしらで傲慢な結論を下すことは、容易ではあっても、余り意味のないことかも知れない。

戦争と革命の時代のマンはまだそれほど余裕のあるものではなかった。大戦はマンにとって文字通り「晴天の霹靂」だった。四〇歳にもなって、それこそ「いい年をして」、マンは新しい現実を認識しなければならなかった。もちろん現実を認識するということはマンにとって単にまわりの物が眼に映るということではなかった。ぼくらの周りにいる無責任ないわゆる現実主義者の説く「現実を見よ」式に、現実と理想をたんに固定的に対立させるだけのものではなく、本当に認識しなければならなかった。しかし、ぼくらのようなデラシネの人間にとってさえ、ふつう認識は無からの認識ではありえないのであって、ぼくらの伝統、教育……といった、いわば「自然」と化した無意識にぼくらがかけているめがねによっているものだ。しかし、そういうでき合いのめがねでは、世界が決定的変革におかれたとき、新しい現実を認識することはできない。たとえば、新しい「事実」は見えても、

新しい「意味」はみることができない。「なぜなら、実際に今までのような仕事を続けていくことは全く不可能であることが私にはわかった。……それは精神的な世界の状況、現在するものの一切の動揺、あらゆる文化的基盤の震撼によるものだった。……もはや文化的根柢として堅固にまた無意識に休んでいるわけにはいかないこの存在を、把握し、闡明し、擁護する必要、つまりこの芸術家たることそれ自体の——その自己探索と自己主張の——基盤の修正が不可避であることがわかった。」そうマンは『考察』の動機を語っている。

マンは大戦を契機に伝統的な精神的ドイツ文化の世界に対し、じぶんがそれによって養われ、それと同一化してきたものであったのに、いまいったんその既成の同一化から自己を分離し、文字通り認識する主体としてのじぶんに立ち帰らなければならなかった。とはいえ、口でこそそういつてみても、およそこれほど困難なことはいだらう。自己と心理的あるいは利害関係で近いものを正当化し、異質なものを遠ざけるのは、いうまでもなくぼくらの自然な傾向である。他人を認識するときには自明のようにみえることが、自己を認識するときには、ひどく困難なものである。また、同じような理由からぼくらはじぶんの所属する集団と自己を常に同一化する。この所属意識や従属根性を打破することは困難である。「わが党」、「うちの会社」、「うちの大学」……。ナシヨナリズムこそはこういう所属意識の最たるものであると考えていいだらう。『考察』のマンは一応価値判断の上ではわざとナシヨナリズムにくみしているが、認識の上では必ずしもそうではない。ぼくらはマンの認識における不徹底さをみるのでなく、かれの認識の主導動機のアジカリテートを読みとるべきであらう。『考察』の「文明の文士」にしても、これをひとつの虚構とみることができる。なぜマンはこんな手のこんだやり方をしたのかといえば、こんな風にいえるかも知れない。危機の時代はもちろんナシヨナリズムの誇張をまねくが、そのばあいしばしばそれ自体は所属意識の裏返しでしかない、一種の逃避主義である政治主義、「はじめに敵ありき」主義、

員数動員主義が生まれる。とりわけデラシネの「インテリ」ほどおっちょこちょいで、いかれてしまい、本当の歴史的危機を単純化し、道徳的、教師的、判定者の教条的なもののみ方、安易な自己正義感で簡単にすりかえてしまう傾向がある。そういうことを誰よりもよく感知したからこそ、マンはじぶんの分身である「文明の文士」を虚構し、これに片棒を担がせたのだ。またナフタのような落伍した知識人、転向者、世の中の苦難にたえられず、ねじまげて憎悪に生きる人間を描出したのだ。

危機的状况の中では、現実には批判によりかかったり、安易な転向を行なうほどまずいことはない。「正義」の名で権威をおそれないという「態度」ではなく熟考に次ぐ熟考で観察と実験を重ね、物事を理性的に把握して行く方法、そうすることによって現実の立体的な構造のなかに含まれている矛盾した両極的な方向への発展の可能性を絶えず同時にとらえていく方法、つまりイロニーと呼ばれる思考がかれの方法だった。そうすることによってはじめて一定の事象、一定の状況のなかに含まれている、望ましい方向へ向うものをのびし、望ましくない方向へ向うものを阻止することができるようになるからだ。

二〇年代後半以後マンは社会主義を承認するようになっていくが、それというのも「病的な危険をはらんだ『精神』と『物質』的現実との間の対立関係をできるだけそうとしている点で、社会主義的階級の方が、その文化的な相手方よりも、たしかにより善い、より活潑な意志を示している」からであり、「社会主義的階級は、文化的な民族精神とは正反対に、その経済的理論からすれば精神とは仲が悪いが、実践においては精神と仲がいい。そしてこれが今日の情勢にあつては万事を決定するものである」からである。いうまでもなくこれは政治思想的転向というよりはむしろ、現実政治へのプラグマチックな経験からのアプローチであり、無謬性の神話・幻想からはもっともかけはなれたもののみ方である。「精神」の価値と政治に対するリアリズムがマンの判断の基

準であり、マン自身は社会主義を信じたのではなく、社会主義は比較的ファシズムの暗黒時代を打破して個人的理想主義、自由の原理を再生させ、「精神」を保証するから、これを承認するというにすぎない。正統マルクス主義の立場からすれば、これほどはがゆい、不徹底なもののみ方はなく、ほとんど「水をさす」ような発言である。救済への信仰はもとより独裁や統制的な権力行使などに対する警告が、すでにこの発言の陰から顔を出している。この「精神」とマンが呼ぶものこそは、マンの政治的・思想的な変化のなかでの、不変なものであるといえよう。いやしくも自分の思想に対して責任をもつ人間ならば、ただ目の前の現実が変わったという理由で、昨日までの思考を弊履のごとくすてて少しも痛苦を感じないというような態度に甘んずることはできない。マンの転向はそうしたものではなかった。

「今日ひとびとが議会主義民主政治や政党政治の失敗にいや気がしているという現象はインターナショナルなものである。」（『バリ訪問始末記』）と二六年のマンはいっている。ちょうどそれはナチの法律界の大物カール・シュミットがリベラリズムとデモクラシーを峻別し、「独裁は、デモクラシーが独裁に対立するものではないのと同様、デモクラシーに対立するものではない。」（『今日における議会政治の現状——二六年』）といっている状況のなかである。「デモクラシーを革命的に止揚しようとする志向と、粗野な反動とを、人々がごっちゃまぜにし、とりちがえる危険が今日ほど大きいときはなかった」とマンは警告している。そういう危険を素朴な民衆のなかばかりでなく、たとえばアルフレート・ボイムラーのような知識人が、ニイチェは古代の聖なる暗黒を知らないからバノハオーフェンにおよばず、アルント、ゲレス、グリムらは真のロマン主義でノヴァーリスやシューレーゲルは括弧つきのロマン主義でしかないと説いているのみにて、はつきりとこれを否定している。いうまでもなく、これは当時のナチズム勢力の伸展に対して挑戦するマンのたたかいのひとつであるが、こういうたたか

いは右のようなマンの方法からでてくるものである。こういうたたかいにこそマンの転向があり、本物の自己変革があるというべきだろう。

『考察』から『ドイツ共和国について』へのマンの歩み、その体験、これはやはり本物であるというほかはない。ぼくらの周囲には今日、マンの『魔の山』などよりもはるかにすぐれた意図をもち、すぐれた政治的主題を扱う体験小説が氾濫しているが、それらの多くに、作者の意図が傲岸に作中人物の体験をあやつるだけで、無残な筋の運びや語り口を見せているのを見ると、デモクラシーを文体の問題にまですることのできたマンの『魔の山』のようなケースはやはりかけがえない。いわば自分自身を知るといふ論理、自分を自分の対象とし、それを否定し、そうすることによって具体的な自分自身にかえるという認識、問題そのもののなかに自分自身を投げ入れ、対象化し、客観化し、その意味で自分を否定しながらしかもそこから自分自身をとり戻すとき、より具体的本質的に自分自身をわがものにすることができるといふ論理につらぬかれたこの作品は、「天性の教育者」プラトニエツシエアルホーシス「あくまで深くそして正しく窮めた教えを、外から生徒につきこもうとするタイプの教育者ではなく、精神的な病歴をもつ教育者」(ルカーチ)でなければ書けない小説であらう。

『人間は善意と愛を失わないためには、考え方を死の支配に任せてはならない』というが、しかし、小説では、愛と善意の要請によってイローニッシュなフィクションのかたちで示された二律背反を克服することは、芸術的表現ではつきり示されることができない。……小説はもっとも明確でなければならないところで不明確になる。」などといって、作品の「内在的批評」を一步も抜け出ることのできないエムリヒや、あるいは、二〇年代に、「精神的内容は単に外的状況の上へ糊で貼りつけた知識でしかなく、この作品の自然はアトリエの絵で、その文体は巧妙さでしかない『魔の山』のおそるべき心情喪失」といい、「こういう心情喪失は、この著作家の単なる

同時代の人間には……働きかけることができるかも知れないが、時代と一緒に亡びてしまう運命にある。なぜならそれは文学にすぎず、詩作品ではないからだ。それはただ文明の知的で明晰な表面を泳いでいるのにすぎず、民族の暗い情緒の根底から生長したものでないからだ」などといったエルマティンガーなどには理解できっこない小説である。

「一九一八年以後のドイツ・デモクラシーはいとわしい運命の——歡迎されぬ——贈物だった。それゆえ、新しく生まれた、実際には少しも確立されていないデモクラシーには、憤激して敵対者や日和見的に我慢しようという者こそ沢山あっても、その味方や支持者となると数えるほどしかなかった。しかも、その人たちもそういう廻り合わせになったから受入れたままで、デモクラシーとドイツの（もちろん修正された）過去との間に橋渡しをしようなどと試みもしなかった。ワイマル共和国でトーマス・マンが孤立していたのは、かれがまさしくそういう媒介を追究し、かれの教育的作品がドイツ的なものの本質から成長してくるはずのデモクラシーを目指していたからである。それゆえ、かれはこの時期に、デモクラシーを世界観の問題として、まさにドイツ的世界観の問題として採上げた唯一の市民的作家だったのである。」というルカーチのことばは、マンという『魔の山』の作者のワイマル共和国における地位をはつきりといひあてている。

しかしそれにしても、マンの多くの作品はたしかにみごとに、全く惜しいような「社会批判的前景」をもっている。たとえば『魔の山』は戦前のヨーロッパの資本主義社会を反映していて、そこに住む人々の寄生虫的「病理現象」は完璧に近いまでに描き出されている。これは大戦前の泰平なヨーロッパの世界だが、ぼくらの昭和三〇年代後半の世界とよみかえてみたいような気がする。平和で繁栄した社会、搾取や殺人を犯していることなど少しも気づかぬように「無感覚と呼ぶデーモン」にとらえられて人々の毎日は過ぎていく。しかし小説と同じよ

うに、ぼくらの周囲でもどうやら「ヒステリーの蔓延」ははじまっているようだ……。けれども、マンの描いているのは、結局、そうした歴史的社会的状況ではなく、むしろ自我の世界の出来事であり、一定の状況のなかでの不断の人間回復の過程である。マンはあくまで自伝によって歴史や社会を描こうとしたのだ。

マンは最後まで社会主義に近づこうとはしなかった。ブルジョワ社会に生まれ、そこに育ったマンは、そのブルジョワ的秩序のなかへ自分をはめこみ、みずからブルジョワ意識を実践するほかはなかった。しかもマンはじぶんの生活や社会・秩序を一種の否定的契機としてしかとらえることができなかった。これはいうまでもなく自己矛盾であり、マンの文学創造ははたがって充溢する生命や円熟というよりは、それを拒否する不毛の世界である。けれどもその絶え間ない自己否定、順応への拒否こそはマンを生きのびさせ、あれほど大きな仕事をさせた根源的な力であった。

マンは最後まで社会主義に近づこうとはしなかった。「マルクスを読」もうとはしなかった。ルカーチのいうようにはニイチェやフロイトを捨ててゐることは、最後までなかった。むしろニイチェやフロイトなどが、それこそマンにとって「運命」だった。この頃からマンは本格的にフロイトに取り組んでいく。すでにナフタの死刑や拷問の讚美はフロイトの（『トートムとタブー』）の濫用にほかならない。マンもフロイト同様、あくまで個人の内面のなかに普遍的なものを求めた。文学とはそういうものだ、とマンは考えたのであろう。わかりきったことがらをこねまわし、社会的面からの引証を行ない、支配的なイデオロギーを借り、積極的なものを強調するだけの同調主義のスローガンとなえ、人間をイデオロギーにしてしまうことは、一見まじめな、建設的で有用な社会変革の仕事であるかにみえる。けれどもそういう風な進歩的「社会学的」「実証主義的」「修正主義的」傾向をマンは文学の方法とは考えなかったらしい。

青年時代から非道德的な、生活に敵対的な諸作品を書き、のみならず『魔の山』の頃しきりに「死への共感」をいつているのがマンである。これは、みかたによっては政治的アンガージュマンはおろか、ひどく反社会的非建設的な物の考え方である。「芸術家の政治的お説教にはどこか滑稽なものがあることは否定できない。人道主義の理想を宣伝することは、かれを不可避免的に浅薄さに近づける——いや浅薄そのものにする。これはわたしの経験したところである。……わたしは、作家の社会的に反動的な傾向をパラドックスであり、かれの職業とそれを営むかれの方法との間にある幾分の矛盾である、と述べたが——それは、このパラドックス、この矛盾が高度の精神的魅力をもちうることに、精神的にやりがいのあるもので、政治的善意などとは比較にならないほど陳腐なものに対する保障となることを意識していたからだ……」とマンは五三年、かれが死ぬ二年前にもいつている。

マンの文学の方法についての非政治的、反社会的な、徹底して個人的自律的なものの考え方は、あるばあいには文学の社会的機能の否定であるかのようにさえみえる。またマンは歴史の理性さえも否定するかのように見える。たとえば五〇年にマンはいつている「歴史が真理の実現者であるかないか、これはきわめて疑わしい。——この疑いこそ私を歴史からそむかせるものであるが、本来の歴史家はこんな疑いなどはもたない。」

マンのこういう「非政治的」傾向は、個人的な資質というものにもよるとひとは思うかも知れない。マンの二人の姉妹も自殺しているし、かれの長男クラウスも自殺している。けれども、それを決して血や素質や性格に帰してしまうことはできない。あのファシズムの暗黒時代にいくに多くの作家や詩人がみずからの生命を絶っていることか。

大戦勃発のとき、マンがもう四〇歳という年齢に達していたことは、かれよりも一世代若い表現主義作家たちとはちがった意味をもったにちがいない。四〇歳にもなって人生をはじめからやり直さなければならぬとは、

何という無残なことか。かれが今まで社会的地位をもっていたというならば、その無残さに一層拍車加わるばかりだ。ぼくはマンのこの時代の歴史的経験の途方もない落差をそらおそろしいと思う。戦前とワイマル初期の一〇年間にマンが体験した断絶と非連続感、それはおそらくマンにとつてとり返しきれないものだった。かれよりも若い世代の作家たちとはちがつて、若いときからマンは人生に対する一種の諦めを抱いて生きていた。むしろこの諦めはふてぶてしいほどの優越でもあった。けれどもそれは諦めだった。それ以外には生き方を知らなかったのだ。そして「晴天の霹靂」ともいふべき戦争が起り、革命は挫折した。マンは眼をこすった。丁度あのカストルプのように。戦前の世界、それはマンにとって何という恥しい世界であったことか。戦争ヘカストルプのような若い人々を送った自分たち、これは何という恥しい存在ではないか。——『魔の山』の語り手もそういつている。こういう恥しさを身に覚えている人間、「降伏の恥」「消えぬ痣」を刻印した人間は、どうしても政治の渦中に入つて行き、変革と建設のプランを立てることは得意でない。現在のなかからうまく未来をくみとるという実践的計画的志向がでてこないで、自分の歩んできた過去にこだわって過去や伝統の問題を、自虐的なまに掘りおこすという保守的な態度しかとれない。いくら善意があつても、何となく気恥しく、また疑わしく、どうしてもできないのだ。けれども、あの時代に、マンのように歴史をほんとうに非連続として感じた人間、初心を失わない人間は、それだけにかえつてみにくい政治を拒否する精神を人一倍もつことができたのかも知れない。

政治に対してマンがとる立場は、結局のところ、ひどく保守的であり、ペスミスチックであり、退行的である。二〇年代以後マンはますます心理学に入っていく。あの激動の時代のなかで、マンは政治的にサンガー・ジェスよりも、主としてどこまでもブルジョワ的自己を掘り下げ、精神的伝統をパロディ化してみせた。そういう仕事を通じて、マンもやはり自由と解放をめざしたのだ。そう考えるほかはない。